

イザヤ書 51 章 1-6 節

ローマの信徒への手紙 11 章 33-36 節

マタイによる福音書第 16 章 13-20 節

朝方だけは少し涼しくなりましたが、日中はまだ猛暑が続いております。皆さま、どうぞ、くれぐれもお気お付けください。

本日の福音書は、イエス様と弟子たちが、フィリポ・カイサリアに向かう途中、ペトロがイエス様に、「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と告白し、天国の鍵を授けられる、有名な物語です。福音書で教会という言葉（もう一つはマタイ 18：17）が用いられている点でも有名です。

物語は、イエス様が弟子たちに、「**人々は、人の子を何者だと言っているか**」と質問することから始まります（16：13）。「人の子」という言葉にはいろいろな意味がありますが、ここでは、「わたし」と同じ意味ととらえてよいと思います。弟子たちは、「**洗礼者ヨハネだと言う人、エリヤだと言う人、ほかに、エレミヤだとか、預言者の一人だと言う人もいます**」（16：14）と答えます。マタイ福音書の物語は、マルコ福音書と異なり、預言者に「エレミヤ」が入りより詳しくなっています。これらの人々は、有名であると同時に、当時の人々がその登場を期待していた人たちですが、イエス様の問いへ答えとしては間違いです。それゆえ、イエス様は、「**それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか**」（16：15）と弟子たちに問いかけるのです。

この問いに対して、弟子を代表してペトロが、「**あなたはメシア、生ける神の子です**」（16：16）と答えます。このペトロの答えは、正しい答えです。ことに、「生ける（生きている）神の子」という言葉を補っていますので、マルコ福音書の記述より、より正しい答えとなっています。しかし、間違っています。それがこの物語の複雑なところなのです。

メシアは、「油注がれた者」という意味のヘブライ語、そのギリシア語訳が「キリスト」です。この箇所も「メシア」と訳されていますが、原典では「イエス・キリスト」の「キリスト」と同じ言葉がすべて用いられています。この「メシア（キリスト）」は、本来は軍事的や政治的な意味でイスラエルを指導し、助ける存在です。しかし、イエス様は、歴史上イスラエルに存在した「メシア（キリスト）」とは異なる方です。同じ言葉でも働きが異なるのです。口語訳では、「**あなたこそ、生ける神の子キリストです**」となっており、この複雑さが伝わりました。新共同訳以降、旧約的なメシアの意味で用いられていると思われる個所の「キリスト」は、「メシア」、イエス様の意味で用いられていると思われる個所の「キリスト」は「キリスト」と訳し分けることとなりました。口語訳の時代は、ペトロはイエス・キリストに対して、「キリスト」と答えたのに、何が間違っているのだろうかという疑問が出て、説明がなければその趣旨がわかりませんでした。現在は、イエス様は「キリスト」であって、「メシア」ではないから、言葉が違うのでペトロは間違いなのだろうとすぐにわかってしまいましたが、この個所の趣旨が伝わりにくくなっています。

翻訳に関する判断の難しいところです。

言葉としては正解だが意味が異なっている。この前提のもと、マルコ福音書もルカ福音書も、イエス様は誰にも話さないようにと命じます。マタイ福音書でもその点は同です。しかし、その前に、イエス様は、「バルヨナ・シモン、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、天におられる私の父である。私も言うておく。あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てよう。陰府の門もこれに打ち勝つことはない。私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる」(16:17-19)とペトロの答えをほめています。そして、有名な教会を建てる、鍵を授けるという発言が続いているのです。

マタイの物語だけはイエス様がペトロの答えを正解と認めたのか、また、この時、ペトロは、天国の鍵を授かったのかということそうではありません。イエス様はここで、「教会を建てる、天国の鍵を授ける、天上でもつながれる、天上でも解かれる」と語っていますが、それらはすべて未来形です。将来起こるべきことを語っています。悪い言い方をすれば、今はわかっていないが、いずれ分かるようになり、そうなった時に、このようにしようとイエス様は約束されたのです。ペトロがわかっていなかった証として、このあとに続く物語で、イエス様ご自分の受難を予告されたとき、ペトロはそれを否定してします。戦って勝つはずのメシアが受難するはずがないと思ったのでしょうか。そして、イエス様から叱られ、サタン呼ばわりもされるのです。

それでは、ペテロの上に教会を建てる、天国の鍵を授ける、これらはどういう意味なのでしょう。先ほどそれらが、未来のこととして語られていると語りましたが、その未来が来る前に、弟子たちは皆、メシアの意味を勘違いし、そしてイエス様が逮捕される時に逃げています。しかし、それでももう一度許されて、集められます。つまり、弟子たちの本当の歩みは、イエス様の十字架の前に、それまでの自分の思い、願い、理想、欲望など、すべてをさらけ出し、もう一度許されて集められるという謙虚さの上に始まっているのです。イエス様は、そのような弟子たちの上に教会を建て、天国の鍵を授けられた、そうマタイ福音書の物語は語っているのです。教会の歴史はすでに二千年に及びます。教会は常にこのことを忘れてはならないのです。

本日の旧約日課、イザヤ書には、「**主はシオンを慰め、そのすべての廃虚を慰め、荒れ野をエデンのように、荒れ地を主の園のようにされる。そこには喜びと楽しみ、感謝と歌声がある**」とあります(イザヤ 51:3)。一度滅んだ王国の歴史を踏まえたうえでの言葉です。そして、イスラエルの復興を臨んだ言葉です。しかし、聖書全体を通して示される、主なる神様の意図を示していると思います。それは、今世界で起きている、戦い、混乱、悲しみ、それらがいつか終わり、世界中で「**喜びと楽しみ、感謝の歌声が響く**」ことです。そのような世界になるためには、人間の努力も必要ですが、その人間が主なる神様の前に謙虚であることが必要です。教会はその謙虚さを世界に示すためにあります。わたしたちの教会もその一つです。大きな教会であればあるほど、その責任は重い、歴史のある教会であればあるほど、その責任は重い、そのことを忘れずに歩み続けたいと思います。